

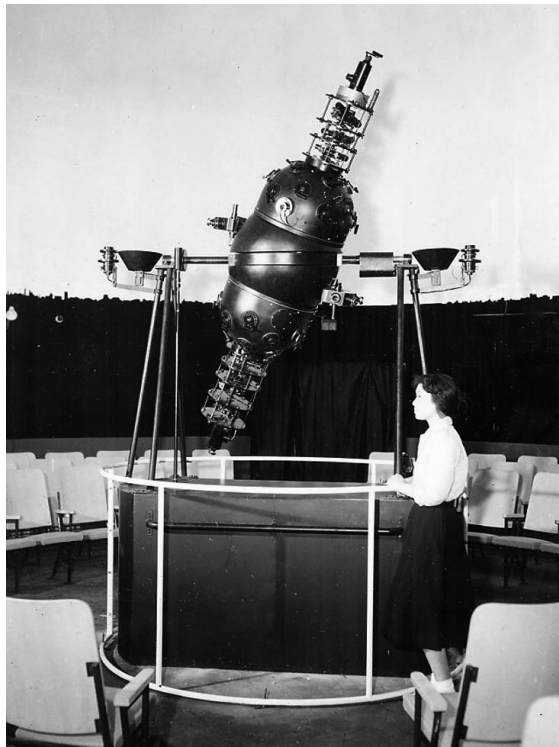
ある むぜお

府中市郷土の森博物館だより

al museo

2026 年 6 月 20 日

No.156



国産初のレンズ投映式プラネタリウム M-1 型 © 五藤光学研究所

もくじ

- 1-2 フチュウで はたらく ウチュウ人
その 1…星空ツクール星人
- 3 最近の発掘調査
真っ黒な土が語る昔の府中
- 4-5 NOTE
書き残された家の盆行事
- 6 展示会案内
特別展 フチュウで はたらく ウチュウ人
- 7 展示会案内
企画展 発掘された戦争の記憶
- 8 series 収蔵庫のニューフェース
珠文縁八葉蓮華文軒丸瓦
- 9 令和 7 年度利用状況 寄贈・寄託資料一覧
新刊案内
- 10 お札からみる府中
①旧家に残された大量のお札

フチュウで はたらく ウチュウ人

府中市内には、宇宙に関わる仕事や活動をしている「ウチュウ人^{じん}」がたくさんいます。そのうち「星空ツクール^{せいじん}星人」、「人工衛星ツクール星人」、「人工衛星ササエール星人」、「宇宙マモール星人」にまつわるエピソードを 4 回シリーズで紹介します。

その 1…星空ツクール星人

1959 年（昭和 34）、星空ツクール星人は日本で初めてレンズ投映式プラネタリウム M-1 型の製造に成功しました。性能が良く、海外製よりも安価だったため、翌年にはアメリカの博物館にも納入されました。これまで累計 1,000 台以上のプラネタリウム^{るいけい}投映機が製造・納入され、世界中で活躍しています。そんな星空ツクール星人が最初につくっていたのは、望遠鏡でした。

フチュウで はたらく ウチュウ人

その 1…星空ツクール星人 そのルーツは望遠鏡ツクール星人



あなたは人生で何回プラネタリウムをご覧になったことがあるでしょうか。こどもの頃に家族と、大人になって恋人と、そしてまた家族やひとり…と、人生で3回見れば多い方だと言われている。あなたが見たそのプラネタリウムをつくったのは、「**星空ツクール星人**」かもしれません。

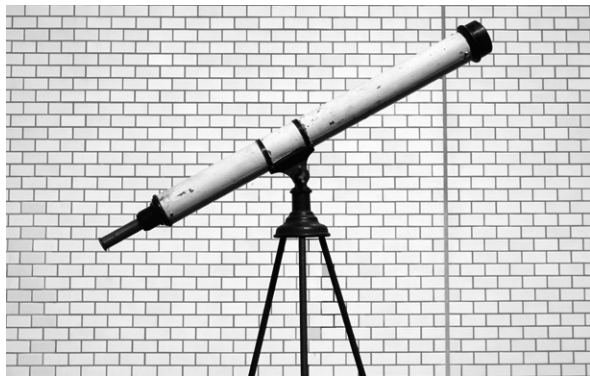
彼らは、府中市矢崎町にある株式会社五藤光学研究所を基地として働いています。これまで1,000台以上のプラネタリウム投映機を日本だけでなく世界中に納めてきました。当館の初代プラネタリウム投映機「GL-AT」も、現プラネタリウム投映機「ケイロンⅢ」も星空ツクール星人がつくったものです。でも星空ツクール星人が最初につくっていたのは望遠鏡で、もともとは「**望遠鏡ツクール星人**」だったのです。最初の望遠鏡ツクール星人は五藤齊三氏です。

今から100年前（1926年 / 大正15）、五藤光学研究所は、国内唯一の天体望遠鏡専門メーカーとして、東京・三軒茶屋に誕生しました。五藤氏はそれ以前に日本光学工業（現在のニコン）に勤務しており、そこにいたドイツ人技師から話を聞いて、光学技術に詳しくなっていたのです。最初に売り出したのは、学校向けにつくられた鏡筒がボール紙でできた1インチ（有効口径2.5cm）望遠鏡乙号でした。当時、望遠鏡は日本光学製が550円、カールツァイス製は780円と非常に高価なものでしたが、五藤氏は事前に学校関係者にいくらなら購入するかを聞いて、学校が購入可能な

値段（30円）にしたことで、発売当初から月に100台以上の注文があり、全国の学校の8割強のシェアになったそうです。この時代には、まだ迷信を信じる人も多く、こどもたちの科学の心を育てたいと思ったことも、安価な望遠鏡を学校向けにつくったきっかけでした。その後、鉄でつくられた鏡筒の甲号をすぐに発売。さらに、レンズを改良し、口径が大きい望遠鏡も制作していきます。そして、戦時中は一旦望遠鏡づくりから遠のきますが、戦後3年で生産を再開し、現在も五藤テレスコープ株式会社にその技術が受け継がれています。この望遠鏡ツクール星人はどうやって星空ツクール星人へと進化していったのでしょうか。

五藤氏は様々な職業を経ながら、当時、「現代の平賀源内」と呼ばれるほど、様々な発明をしてきました。その一つに、太陽熱利用の研究があります。戦後、電力不足が起こっていたことから、太陽エネルギーを使った太陽熱炊事器を発明しました。それがスタンフォード大学の教授の目に留まり、アメリカで行われた太陽熱利用世界シンポジウムに参加することになります。その際、アメリカの主要な天文台を訪問し、プラネタリウムも見学して館長から説明を受けたことで、プラネタリウムの国産化を目指す決意をします。そしてアメリカでプラネタリウムを見た4年後、1959年（昭和34）に国産初レンズ投映式プラネタリウムM-1型を完成させました。こうして星空ツクール星人となった五藤氏が矢崎町に住み着いたのは1963年のことです。府中市工業誘致企業第1号でした。

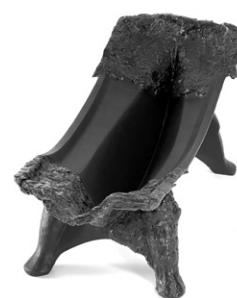
五藤光学研究所の「研究所」という名前には、「会社は小さくても常に研究的態度をとり、従業員一人ひとりが研究する精神を忘れるな」という思いが込められています。星空ツクール星人はこれまでに35機種ものプラネタリウム投映機を開発・製造してきました。その最新型が当館に納入されている「ケイロンⅢ」です。さあ、あなたも人生で一度は、星空ツクール星人がつくり出した星空を楽しんでみませんか？（塚田小扶里）



望遠鏡乙号 © 五藤光学研究所

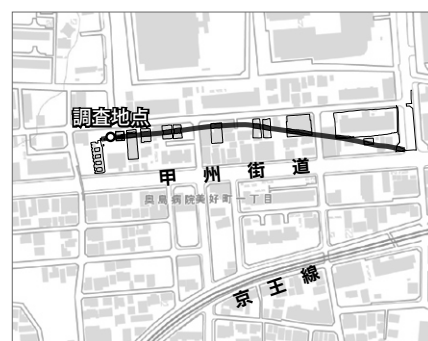
最近の発掘調査

真つ黒な土が語る 昔の府中



薬研（宮西町1丁目出土）

美好町1丁目 府中市ふるさと文化財課 佐藤 梨花



東西方向に延びる薬研堀



薬研堀の断面

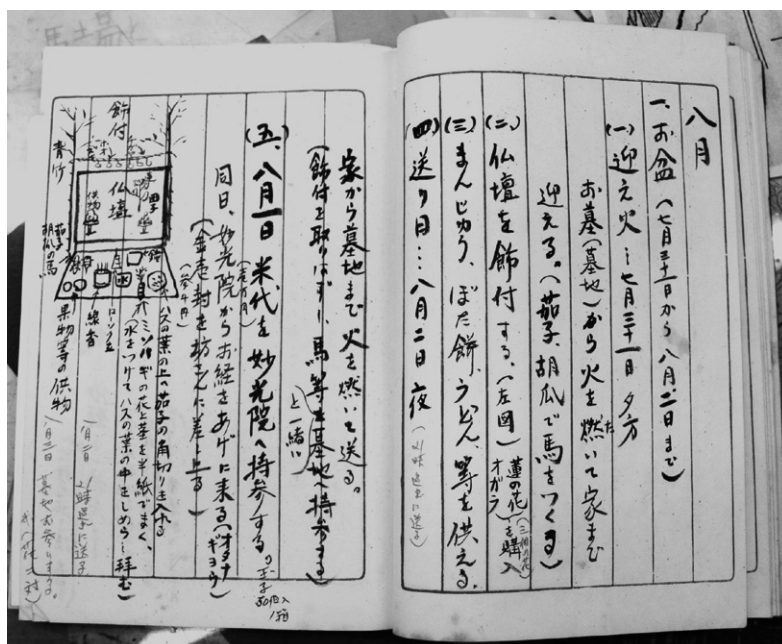
美好町1丁目^{み よしちょう}で大きな溝を調査しました。これまでの調査から、溝は東西方向に400 m以上延びることが確認されており、中世の溝と考えられています。今回調査した箇所は、遺構検出面からの深さが約1.8 m、幅は遺構検出面で約4 m、底で約0.4 m、断面は緩いV字形^{ゆる}を呈^{てい}しています。このような、底がすぼまり、上部は大きく開く形状の溝を「薬研堀^{やけんぼり}」と言います。薬研堀は、断面形が「薬研^{しょうやく}」（生薬などをすり潰す道具）の形状に似ていることからこう呼ばれ、中世の城の堀などで見られます。

今回は、この溝に堆積^{たいせき}していた土についてお伝えします。今回調査した箇所では、上部に真つ黒な土の層がありました。このような真つ黒な土は府中ではあまり見られないものです。そこで不思議に思い、土壌分析^{どじょうぶんし}をおこなったところ、多量の微粒炭^{びりゅうたん}とケイ酸体^{けいさんたい}が検出されました。

微粒炭^{たんか}は、植物が燃えて炭化した微細な黒い粒子で、土を黒くする原因となります。ただし、溝の中に燃焼痕跡^{こんせき}は無く、溝の外で燃えた植物の炭を含む土が溝に堆積したと考えられます。一方、ケイ酸体は植物に含まれるガラス質の微化石^{ひかせき}で、植物ごとに形が異なるため種類の特定が可能です。分析の結果、ウシクサ族（ススキ等）、キビ族（ネコジャラシ等もしくはヒエ等）、ササ類、シバ属、イネ族などのケイ酸体が一定量確認されました。

このように、今回検出されたケイ酸体からは、溝が半分以上埋まった時点での周辺の環境を考える重要な手掛かりが得られます。ウシクサ族が確認されたことから開けた草地^{ひら}があり、キビ族からは畑の存在も考えられ、また、ササ類からは林などの存在が、またシバ属からは人が行き交う道の存在が推測できます。そしてイネ族は、稲わらの存在を示唆^{しさ}します。八ヶ下の水田から稲わらが持ち込まれ、何らかの理由で燃やされたのでしょうか。

このように、自然科学分析によって、かつてこの付近に広がっていた風景を考えることができました。



1979年における馬場家の年中行事を記した冊子
写真は8月の行事内容のページで、左上に仏壇の飾付が図解されている。

▼ 書き残された年中行事

市内にある鎮守の神社で行われる年中行事では、地域の氏子たちが準備からたずさわっています。しかし、行事を取り仕切る氏子は毎年交代するため、これまでの状況を振り返って作業の確認をしている場面をみることがあります。

近年では、氏子たちが行事の様子を撮影したり、パソコンで書き留めたりして記録する様子もみられるようになりました。それは当番の引き継ぎとともに渡され、翌年の参考とされています。

年中行事は、家々でも行われています。ただし、それを行う人は頻繁には変わらないため、家では神社のように記録して引き継ぐ機会は少ないでしょう。そのようななか、年中行事の記録を保管している家が市内にあります。

例えば、小田分（現 小柳町）に住む馬場さん（1948年生まれ）は、「家の年中行事」という冊子をお持ちです。これは1979年（昭和54）に馬場さんの父親が自宅で行っていた年中行事についてまとめたものです。

そこには、正月の準備から始まり、大晦日の就

寝前にする晦日祓いまで、当時の馬場家で行われていた年中行事の日付と、その内容や準備物が箇条書きで示されています。

▼ 冊子に書かれた盆行事

冊子の内容について、今回は8月のページを紹介します。そこには7月31日に迎え火をたいて先祖の魂を家に迎えることから書かれています。翌日の8月1日は檀那寺である妙光院（本町）に米代を持参するとあります。このときに施餓鬼会の受付をしていました。同日には妙光院の僧侶が馬場家に来て読経をする棚経も行われています。次ページ以降に、2日は迎えた魂を送る送り盆を行い、3日に墓参りをし、7日に妙光院の施餓鬼会へ参列して卒塔婆をもらおうと書かれています。

府中では農村部だった地域を中心に、新暦が導入された明治時代以降、通称「府中盆（一日盆）」といって8月1日から3日の前後をお盆にしています。馬場家のある小田分は現在も府中盆で行われている地域のため、冊子には7月31日から8月2日までとあるのです。

もう少し内容を詳しくみてみましょう。7月31

日に行うことについて、冊子には「夕方 お墓（墓地）から火を燃^たいて家まで迎える。（茄子、胡瓜で馬をつくる）、仏壇を飾付する。蓮の花・オガラを購入。まんじゅう、ぼた餅^{もち}、うどん等を供える。」とあります。府中では茄子を牛、胡瓜を馬とするところがよくみられますが、冊子には「馬」とだけ書かれています。

また、仏壇の飾付が図で示されています。そこには、仏壇の両側に青竹を立て、縄にしたチガヤで結び、ホオズキを吊^つるした様子がみえます。

仏壇の手前には、お盆につくられる盆棚の飾付も記されています。盆棚の右端には「ハスの葉の上へ茄子の角切りを入れる」、「ミソハギの花と茎を半紙でまく」という記載があり、茄子の角切りとミソハギが供えられていたことが分かります。続いて、「鐘（御鈴のことか）、水、ローソク立、線香、果物等の供物、茄子・胡瓜の馬」とあります。このように、冊子に記された迎え盆の内容や手順、飾付の図解から、1970年代における迎え盆の様子が窺^{うかが}えます。

▼ 仏壇の飾付に生じた変化

馬場家では、いまもこの冊子をもとに年中行事を行っています。2025年（令和7）に馬場家の迎え盆をみせていただくと、仏壇の飾付に記録との違いがあることが分かりました。

例えば、盆棚のチガヤは笹を束ねたものになり、そこに吊るすホオズキは市販の紙製品に変わっていました。これらは、自宅の庭で採れなくなったからだといいます。茄子の角切りをのせる葉は、ハスの葉に似ている里芋の葉を近隣の農家から分

けてもらっていました。

また、茄子と胡瓜の馬は、市販のイグサでつくられた馬に変わっていました。送り盆で先祖の魂を送った後、取り外した仏壇の飾りと共に馬を墓地へ供え、翌日のお墓参りで片づけるとのことです。お供えした際、茄子と胡瓜だと猫にイタズラされるため、いまの素材になったそうです。

▼ 昔の記録と現在の行事を比べてみえること

仏壇の飾付を代用する、もしくは購入するようになったという話は、馬場家だけでなく他の家でも聞く話です。とはいえ、冊子の記録があったからこそ、変化を具体的に把握することが可能だといえるでしょう。

一方、現在の迎え盆では、墓地で点けた線香を持ち帰り、それを玄関先へお供えしています。また、お盆の期間中に訪れる、先祖以外の霊であるムエンサマ（無縁仏）へのお供えとして、うどんとミソハギ、茄子の角切りが盆棚の下に置かれています。これらは馬場家で昔から行われているようですが、冊子の記述にはありません。

迎え火の時間帯や、仏壇の飾付が図付きで示されているのは、冊子を書いた人が迎え盆のなかで重要だと考えていたからではないでしょうか。他方で、線香を供えることなどは、当たり前のこととして考えていたのかもしれませんが。書かれていなくとも、当然のこととして現在まで続けられてきたのでしょう。

昔の記録と現在の行事を比べると、変化に加えて、記録者が年中行事のどこに注目していたのか、またはそれをどう認識していたのか、といった点も気になるところです。



飾り付けられた馬場家の仏壇（2025年撮影）



玄関先に線香を供える様子（2025年撮影）

展示会案内

平和都市宣言40周年

特別展

フチュウで はたらく ウチュウ人

7/25(土)～10/4(日)

会場：本館1階 特別展示室

ここ「フチュウ」には宇宙に関わる仕事や活動をしている「ウチュウ人^{じん}」がたくさんいることをご存知でしょうか。宇宙に関わる仕事となると、想像するのは宇宙飛行士や天文学者かもしれませんが、でもその職業を成立させるためには、宇宙飛行士を宇宙へ運ぶロケットや天体を観測するための人工衛星などをつくる人、そしてそれを運用する人、その人を育てるために宇宙に関する教育をする人などが必要です。さらには、その仕事を支える道具や部品をつくる人もいるのです。

まずは「人工衛星ツクール星人^{せいじん にしふちゅう}」。府中市西府町に基地を置き、人工衛星の設計、製造、運用などを行っている日本電気株式会社（NEC）の方々です。私たちがスマートフォンで使っている位置情報は、この「人工衛星ツクール星人」がつくったシステムが搭載されている準天頂衛星「みちびき^{じゆんてんちよう}」が宇宙から送ってくれています。小惑星探査機「はやぶさ^{しょうわくせいたん}」「はやぶさ2」のイオンエンジンをつくったのも人工衛星ツクール星人でした。

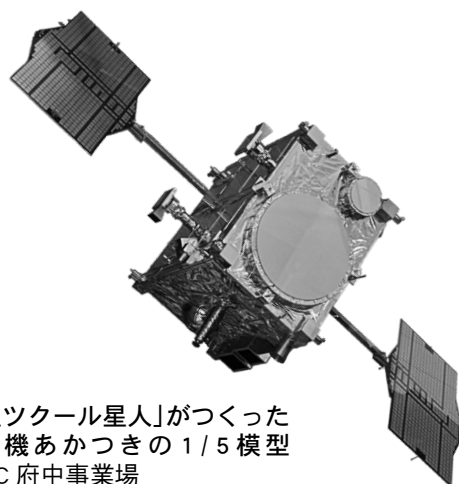
そんな探査機やロケットには、「人工衛星ササエール星人^{ていこうき}」がつくった抵抗器が搭載されています。50年以上、宇宙航空研究開発機構（JAXA）の機器に抵抗器を提供してきた矢崎町の真田 KOA 株式会社の方々です。米粒よりも小さなものから、1 m くらいの大きさまで、様々な抵抗器をつくっていて、宇宙関連機器はもちろん、自動車やスマートフォンにも使われています。

そんなウチュウ人たちの技の結晶として打ち上がった人工衛星を見守るのは「宇宙マモール星人」です。東府中に基地を置く航空自衛隊宇宙作戦団の方々は、宇宙にいる人工衛星が宇宙デブリや他の人工衛星とぶつからないか見守っています。宇宙デブリとは、宇宙に浮かぶ使われなくなった人工衛星やロケットの切り離し部分などで、その数は27,000個以上に及びます。宇宙に国境はなく、世界中の国が人工衛星を打ち上げるため、様々な危険や脅威から人工衛星を守っています。

そんな宇宙^{みりよう}に魅了される場所をつくりだしているのは、「星空ツクール星人」です。矢崎町の株式会社五藤光学研究所^{ごとうこうがくけんきゅうしよ}の方々は、光学式プラネタリウム投映機を製造し、日本だけでなく、世界中の人たちに満天の星を提供しています。投映機は1点もの。設計から製造、組み立てまで、星空ツクール星人がひとつひとつ手づくりしています。

そんな星空ツクール星人がつくったプラネタリウム投映機「ケイロンⅢ」でお客様に星空を紹介しているのが、私たち「宇宙ヒロメール星人」です。その宇宙ヒロメール星人が日々楽しみに見ている衛星放送を全国に届けているのは東府中にある株式会社放送衛星システムの方々「衛星放送トドケール星人」で…と、どこまでも続くフチュウのウチュウ人ネタ…。

この展示ではウチュウ人が日々どのように仕事をしているのかを紹介しつつ、その一部を体験していただきます。展示を見終わったところには、「フチュウ市」が「ウチュウ市」に見えてくることでしょう。（塚田小扶里）



「人工衛星ツクール星人」がつくった金星探査機あかつきの1/5模型
所蔵：NEC 府中事業場

発掘された 戦争の記憶

7/18(土)～10/25(日)

会場：本館 2 階 企画展示室



白糸台 2 丁目に残る掩体壕 府中市の史跡に指定され、整備されている。

調布飛行場にほど近い市内白糸台に、奇妙な鉄筋コンクリート製の建造物があるのを知っていますか。アジア太平洋戦争の末期に、戦闘機・飛燕を格納するために建造された掩体壕です。

こうした戦時下の建造物は近年になって考古学の調査・研究の対象としてクローズアップされています。文字による記録や言葉による伝承とともに、当時の様子を知るうえでの重要な資料として認識が高まってきているのです。

戦後 80 年を経過した現在、戦争や戦時下のくらしの体験者は少なくなっています。郷土の森博物館では戦争に関わるモノの収集にも努めていますが、年月の経過とともに関連するモノは少なくなっていると感じます。

その一方で、発掘調査によって得られる戦時の遺構や遺物が増え、蓄積されているのです。特に、府中市には古代国府に関連する遺跡が広がっていて、中世・近世・近現代のくらしの痕跡もその上に重複しています。まちの中心核がほとんど動いていない点が大きな特色です。このため、掩体壕のような特徴的な建造物のみならず、府中のま

ちでくらしていた普通の人びとの営みをうかがい知ることのできるモノも発掘されているのです。防空壕の跡、軍需第一で金属が欠乏するなか、代用品としてつくられ使われた焼き物の数々、子供たちのくらしにまで影を落とした戦時色の濃い遊び道具など。足もとから掘り出されたモノは、その場所での戦時下のくらしぶりを私たちに教えてくれます。

府中市は 1986 年（昭和 61）に平和都市を宣言しました。本展は、それから 40 年という節目の年に、発掘されたさまざまなモノを軸にして、戦時の記憶をよみがえらせる試みです。戦時下のくらしぶりのみならず、戦場に駆り出されたのがだれで、どこで戦ったのか、そして終戦直後の様子にも目を向けてみます。生の証言ほど有弁ではないかもしれませんが、発掘されたモノをみつめ、声なき声に耳を傾け、平和への誓いを新たにすることができれば幸いです。

（深澤靖幸）



捨てられた銃剣類 日鋼町で発掘された。銃身は曲げられて使えないようにして捨てられたようだ。東京都教育委員会所蔵

珠文縁八葉蓮華文軒丸瓦【考古】

郷土の森博物館では、府中や多摩地域、旧武蔵国などにゆかりのある歴史・民俗・考古・美術工芸・自然の資料、天文関係資料を収集しています。個人の方から寄贈・寄託していただいたり、時には古書店などから購入したりします。本シリーズでは、近年新たに収集した資料、いわば収蔵庫のニューフェース（新顔）をいくつかご紹介します。

トップバッターは、考古分野より「珠文縁八葉蓮華文軒丸瓦」です（2026 年個人寄贈 / 左写真）。漢字を羅列したこの名称を解いてみると、「丸い粒（珠文）を周縁部にあしらった、花卉が八枚の蓮華をモチーフとする、軒先に葺かれた丸瓦」といったところでしょうか。

もとは骨董品として扱われていたもので、瓦当（瓦先端の丸い部分）のみが残っています。また、出土地等の来歴は不詳です。しかし、瓦当の文様によって、この瓦は朝鮮半島・新羅の都城（王

宮）だった月城周辺（大韓民国慶州市）で見つかったものと推測できます。『新羅瓦塼』（国立慶州博物館編）などをみると、今回寄贈された瓦と文様やサイズが似た瓦の写真がいくつか掲載されています。新羅では7世紀の終わりからこのタイプの瓦が出現したようです。

それでは、なぜこの瓦を当館の収蔵資料として迎えたのか。この瓦の文様が、市内の発掘調査で出土している古代寺院「多磨寺」に葺かれた瓦と類似しており、その系譜をたどるうえで有用であるからです。多磨寺は、府中の京所（大國魂神

社東方）における発掘調査などによってその存在が明らかになっていて、7世紀末～8世紀初頭に武蔵国多磨郡の郡司（役人）層によって建立されたと考えられます。右写真の軒丸瓦は多磨寺が創建されたころ仏堂に葺かれたもので、欠けている部分もありますが、范（木製の型）からの抜けが良く、文様の立体感がきわだった逸品です。このほかにも同様の瓦が京所では複数出土しています。

多磨寺創建期の軒丸瓦は、新羅の瓦を祖形とすることがすでに指摘されていますが、朝鮮半島の発掘調査で出土した資料の収集は困難です。そのため、来歴は不詳でも今回の寄贈瓦は多磨寺の瓦の

ルーツを示す重要な資料と捉えています。

この紙面では写真の大きさをそろえています。寄贈された瓦に限らず新羅の軒丸瓦は小ぶりで、実際には瓦当の直径や厚みが多磨寺の瓦と異な

ります。また、花卉の子葉が左は窪んでいるのに対して右は膨らんでいるといった違いもあります。文様があしらわれた瓦は製作地（窯）を比定できることが多いのですが、実は多磨寺創建期の軒丸瓦は、日本列島に技術や文様が伝播したあとどこで製作されたのか判然としていません。ただ、新羅の瓦をルーツとしながら、細部が変化した結果であることは確かでしょう。

多磨寺の瓦は常設展示していますが、そう遠くないうちに、このニューフェースの瓦とならべて展示してみたいと考えています。（石澤茉莉子）



ニューフェースの朝鮮半島の瓦
瓦当直径約 14cm、厚さ約 3cm



多磨寺に葺かれた瓦
瓦当直径約 21 cm、厚さ約 5 cm

令和 7 年度 利用状況

区分		有料		減免 (障害者・ 4 歳未満等)	特別投映 等	合計
		一般	団体			
博物館 観覧者 開館日数 309 日	大人	204,483	2,124	62,975	—	269,582
	子供	29,840	6,902	72,844	—	109,586
	小計	234,323	9,026	135,819	—	379,168
上記のうち プラネタリウム 観覧者 投映日数 308 日	大人	27,930	938	10,533	6,215	45,616
	子供	11,046	5,540	6,442	2,597	25,625
	小計	38,976	6,478	16,975	8,812	71,241

令和 7 年度 寄贈・寄託資料一覧

No.	寄贈・寄託者 (敬称略)	資料名	分類	数量	受入
1	中山 真治	「武蔵国府中町旧馬場ノ景」 絵葉書	歴史	1 点	寄贈
2	渡辺 浩一	渡辺浩一氏関係史料	歴史	一括	寄贈
3	内藤 和良	本宿内藤清兵衛家文書	歴史	607 点	寄贈
4	松浦 宏	下河原線関係資料	歴史	45 点	寄贈
5	夏村 美恵	在日米軍表彰状・朝鮮戦争時 の教本	歴史	2 点	寄贈
6	岩本サカ工	在日米軍表彰状	歴史	2 点	寄贈
7	内藤 英夫	内藤学文書	歴史	一括	寄贈
8	夏目 俊一	夏目与志男家文書	歴史	一括	寄贈
9	黒田 京子	賞状・感謝状等	歴史	一括	寄贈
10	番場自治会連合会	番場自治会連合会資料	歴史	一括	寄託
11	夏村 美恵	電気こたつ	民俗	1 点	寄贈
12	熊谷東一郎	車丑(車大工)焼印	民俗	1 点	寄贈
13	内藤 英夫	古峰神社天狗額・学習机・表札	民俗	3 点	寄贈
14	夏目 俊一	古写真・一宮小野神社幕等	民俗	一括	寄贈
15	黒田 京子	府中町黒田外科医院資料	民俗	一括	寄贈
16	一島 文博	野鳥剥製標本	自然	35 点	寄贈
17	佐藤 晶子	外国産昆虫標本	自然	193 点	寄贈
18	岩本サカ工	多磨小学校卒業証書	教育	1 点	寄贈

資料をご寄贈ください！

博物館では府中に関わる資料を集めています。

寄贈をご検討いただける方はぜひご一報ください。

昭和 40 年代以前の家電製品、府中に関わる古写真、

養蚕や信仰に関わる資料、府中で出土した土器や石器 など。



新刊案内

＊『府中市郷土の森博物館紀要』39 号
学芸員他による研究報告・論文集です。 400 円

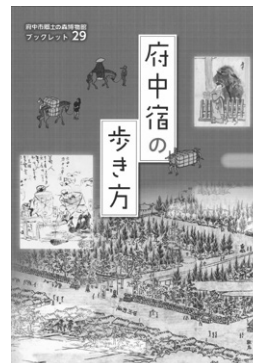
- ・旧満洲国在勤日本人の子弟の教育受託
－アジア・太平洋戦争下の旧制明星中学校－
[高島秀樹]
- ・戦時下の府中町に造られた防空壕 [湯瀬禎彦]
- ・小代仏師の板碑
－八王子市龍光寺所在文和 2 年銘板碑をめぐって－
[深澤靖幸]
- ・昭和 32 年の日記からみる年間の農作業
－市内四谷を事例として－
[荒 一能]
- ・大國魂神社の神輿と分担町内決定に関する一考察
－御本社御輿役と番場宿の関係構築－
[下村盛章]
- ・押立 100 年の物語
－横田寿々子ライフヒストリー－
[かぶらぎみなこ]

＊府中市郷土の森博物館ブックレット 28
『田んぼとくらし』 200 円



トラクターや田植え機
が使われる前のお米づ
くりとは？ かつて田ん
ぼでおこなわれていた
お米づくり以外の活動
とは？ 府中の田んぼを
題材に田んぼと人々の
くらしの関わりを紹介
します。

＊府中市郷土の森博物館ブックレット 29
『府中宿の歩き方』 500 円



甲州道中の宿場「府中
宿」として栄えた江戸
時代の府中。市内に
残る資料を中心に、か
つての府中宿の姿を探
ります。本書を片手に、
府中宿の面影をめぐっ
てみませんか？

※ミュージアムショップ・郵送にて購入できます

「あるおぜお」は当館 HP で閲覧できます！

No. 1 ～最新号を PDF で掲載しています

お札からみる府中

①旧家に残された大量のお札

このシリーズでは、市内の旧家で見つかった古いお札を通して、府中における江戸時代から現在までの信仰と、その変遷を紹介していきたいと思います。

2020年（令和2）、市内の旧家・内藤清兵衛家（美好町）の屋根裏から、ぎっしりお札がつめこまれた俵が三つも発見されました。その俵の上にも大量のお札がむきだして積まれていました。全て数えると、7,000枚以上ありました。現在確認されているお札群のなかでは日本一多い数です。発行場所は350箇所以上。その中には、廃寺になったり戦災で失われたりした寺社のお札も含まれていました。

お札には発行年月が書かれていることがまれで、発行時期の特定が困難です。しかし、状況証拠から、これらのお札群はおおよそ江戸時代後期から昭和初期頃までの間に集められたものと推測されました。例えば「六所宮」と記されたお札は、明治初期に改称した、現・大國魂神社のものであり、「弥勒寺」のお札は、廃寺となった現本宿町にあった寺院が江戸時代に発行したものと考えられます。また、伊勢神宮（三重県）や秋葉権現（静岡県）、榛名神社（群馬県）など、遠隔地のお札もありました。

寺社から発行されるお札は、年末年始や縁日などの定期的な機会に新しく取りかえるのが一般的です。すると古いお札はお焚きあげしたり、発行元に返却したりして、大半は失われていきます。しかし、古いお札を処分せず意図的に保存する例があり、その方法は2つのタイプに分けられるようです。ひとつは内藤家のように俵につめる等、自宅屋根裏に収納するタイプ。もうひとつは壁や額など所定の場所に次々と古いお札を重ね貼りしていくタイプです。いずれも複数の事例が確認されており、100から1,000枚単位のお札が残されるようです。



内藤清兵衛家（美好町）屋根裏で発見された大量のお札群は、俵三つの中につめこまれていただけでなく、俵の上部にむきだしのまま積み上げられていた。

なぜお札を処分しなかったのか？ 一度役割を終えた古いお札を集めておくと、家の魔除けや火事除けにつながると考えられていたからでしょう。この例は、家内安全、諸願成就などといった各寺社がかかげる具体的な御利益とは別に、お札のかたまり自体が魔除けだということ、おまじないのような意味づけがされていたといえるでしょう。何が契機となってこのようなお札保存の風習が発生したのかは分かっていませんが、日本各地でこうした例が報告されているため、広く知られたおまじないだったと思われる。

こうして残されたお札群を具体的に分析すると、府中近辺の寺社の変遷をたどることができそうです。さらに全国の屋根裏で発見された似たようなお札群の例と比較することで相違点が浮きぼりになれば、府中における信仰の変遷を、より一層深く理解できるでしょう。ただ単に数が膨大であるだけでなく、さまざまな情報が読み取れる、興味深い資料のかたまりなのです。

（佐藤智敬）



市内片町の旧家にあった額には、大國魂神社や川崎大師など、様々なお札が重ね貼りされていた。